

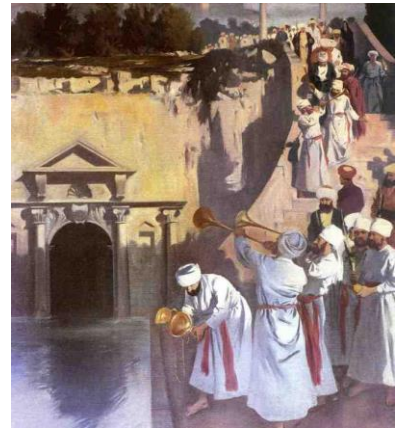
「生ける水の川」

ヨハネの福音書 7:37~53

1. 水を汲む祝い

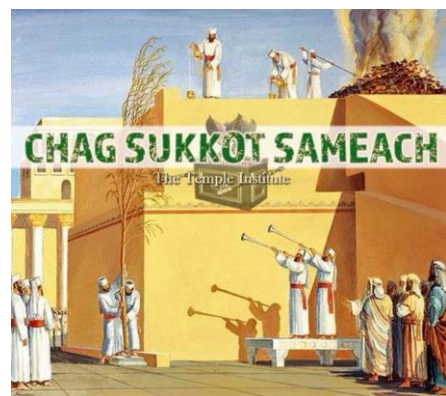
7:37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

祭りの終わりの大いなる日、つまり仮庵の祭りの8日目に、ユダヤ人たちは特別な儀式を行います。それは「水を汲む祝い」と呼ばれていました。その日、神殿に仕える祭司たちは、シロアムという名の池に下って行きます。それはこの儀式の名にあるとおり、この池から水を汲んで、再び神殿に持ち帰るためです。人々はこの祭司たちの後に付き従い、樂



器を鳴らし、喜び歌いながら歩いて行きます。祭司たちは池から持ち帰った水を神殿の中の祭壇に注ぎかけます。その時人々は祭壇の周りを歩きながらホザナ、ヘブル語発音ではホーシーア(הוֹשִׁיעָה)ナー(נָא)と叫びます。これは「ああ、どうか救ってください、どうぞお救いください」という意味です。その祭壇の傍らには一本の柳の木の枝が置かれていました。幹から切り取られた柳の枝は、すぐに水分を失って干からび、わずかな時間で枯れてしまいます。その渇いていく様を自分たちにたとえながら、柳の枝に水が必要のように、私たちには神様の救い、助けが必要です。どうぞお与えくださいと求めることを意味する儀式がこの「水を汲む祝い」です。

その最中に、イエシュアは人々に向かって、だれでも柳の枝のように渇いている、わたしのもとに来てわたしを飲む、つまり受け入れ、信じなさいと叫ばれたのです。ユダヤ人たちが叫んでいたホサナ、ホーシーア・ナーのホーシーア(הוֹשִׁיעָה)とイエシュア(ישוע)はともにヤーシャ(ישע)「救う、助ける、勝利をもたらす」という意味の同じ言葉です。つまりユダヤ人たちは、無意識のうちにイエシュアの名を呼び求めているということになります。これは後に起こることの型です。この仮庵の祭りが「ダビデの仮庵」にたとえられたイスラエル王国の再興のために現れるメシアを待ち望む祭りであることを先に述べました。祭りの終わり、「終わりの日」にユダヤ人たちがイエシュアを呼び求めることが表されていると考えられます。それはユダヤ人たちが、幹から切り取られた柳の枝のように、干からびて枯れる寸前のような状態、つまり滅びる寸前の状態に陥った時です。ゼカリヤ書にこのような預言があります。



ゼカリヤ

12:1 宣告。イスラエルについての主のことば。——天を張り、地の基を定め、人の霊をその中に造られた方、主の御告げ——

12:2 見よ。わたしはエルサレムを、その回りのすべての国々の民をよろめかす杯とする。ユダについてもそうなる。エルサレムの包囲されるときに。

12:9 その日、わたしは、エルサレムに攻めて来るすべての国々を捜して滅ぼそう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと哀願の霊**を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。

終わりの日、エルサレムは、ユダヤ人たちは獣と呼ばれる反キリスト、偽メシア率いる世界中の軍隊に取り囲まれ、絶体絶命の危機に直面します。その時神様はユダヤ人たちにひとつの霊、「恵みと哀願の霊」を送られ、自分たちが突き刺した者、すなわちイエシュアを十字架にかけて殺したことを悔やみ、激しく泣いて「心の底から」悔い改めることが記されており、それを指し示す記述が次に記されていると考えられます

2. 川

7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の**心の奥底**から、生ける水の**川**が流れ出るようになる。」

7:39 これは、イエスを信じる者が**後になってから受ける御霊**のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。

後になって受ける御霊、恵みと哀願の霊がユダヤ人たちに注がれ、彼らが心の底から悔い改め、ホサナ、ホーシーア・ナーとイエシュア、すなわちメシアを呼び求めるその時、イエシュアは再びこの地上に帰って来られ、ご自分の国、ご自分の民であるイスラエルを再興し、ユダヤ人たちはその地を所有するようになります。「生ける水の川」という言葉がありますが、「川」はヘブル語でナハル(נַחַל)という「谷川、流れ、激流」という意味の名詞が使われているのですが、これが動詞になるとナーハル(נָחַל)となり、その意味は「所有する、相続する」となり、同じ綴りで全く別の意味を持っています。そして生ける水、マイム(מַיִם)・ハツィーム(חַיִּים)は、命の水、尽きることのない泉にたとえられる、永遠の命を指し示す言葉ですから、生ける水の川とは、永遠の命を受け、相続する、永遠に所有するという意味があると考えられます。

3. 分裂

7:40 このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、「あの方は、確かにあの預言者なのだ」と言い、

7:41 またある者は、「この方はキリスト（メシア）だ」と言った。またある者は言った。「まさか、キリスト（メシア）はガリラヤからは出ないだろう。

7:42 キリスト（メシア）はダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」

7:43 そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった。

イエシュアの発言により、人々の間に分裂が起こったとあります。ルカの福音書にもイエシュアご自身の口からこのことが語られています。

ルカ

12:51 あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。

争いや戦いをイメージしてしまいがちですが、「分裂」とはすなわち「分ける」ことです。そしてその分類は神様を「信じる者」と「信じない者」です。今のこの時代は、信じる者も信じない者も同じ環境に生かされていますが、イエシュアが再びこの地上に来られるその目的は、信じる者は神の国、御国へ、信じない者は永遠の滅びである火の池、一般的に地獄と呼ばれる場所へと「分ける」すなわち「裁く」ことです。

7:44 その中にはイエスを捕らえたいと思った者もいたが、イエスに手をかけた者はなかった。

7:45 それから役人たちは祭司長、パリサイ人たちのもとに帰って来た。彼らは役人たちに言った。「なぜあの人を連れて来なかったのか。」

7:46 役人たちは答えた。「あの人が話すように話した人は、いまだかつてありません。」

7:47 すると、パリサイ人が答えた。「おまえたちも惑わされているのか。」

7:48 議員とかパリサイ人のうちで、だれかイエスを信じた者があったか。

7:49 だが、律法を知らないこの群衆は、のろわれている。」

7:50 彼らのうちのひとりで、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。

7:51 「私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。」

7:52 彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤの出身なのか。調べてみなさい。ガリラヤから預言者は起こらない。」

7:53 「そして人々はそれぞれ家に帰った。

このように祭司長やパリサイ人、つまりニコデモを除いたユダヤ人の指導者たちは、「その人から直接聞き、その人が何をしているのか」すなわちイエシュアをよく知ろうとしませんでした。イエシュアの言われた言葉に耳を傾け、そしてイエシュアが一体何をなさろうとしておられるのかを知る、これが重要なのです。7:42で群衆の中にはイエシュアがユダヤのベツレヘムでお生まれになったことを知っていて、またミカ書に預言された言葉を知っている者がいました。

ミカ

5:2 ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。

しかしパリサイ人たちはそれを知らなかった、いや知ろうとしなかった、若しくは知っていたが認めようとしなかった、つまり聖書の預言を拒絶したのです。そして7:51で、ついには自分たちが守ってきたはずの「私たちの律法」さえも無視することになっていきます。イエシュアだけが神様を信じ、神様を知り、そのご計画

を知る唯一の道なのです。これを否定するならば、どんなに努力しようと、どんなに学ぼうと、どんなに豊かになろうと、真理はその人から隠され、遠ざけられてしまうことがここに表されていると考えられます。